Japanese Association for Religious Studies

を形成する契機となしえる。その共通理解とは、龍神を信仰することは具体的なご利益が生じることであり、他方では自身に起きた霊験と同様なことが他の講員にも起きているということである。前者はいわば他人に起きた霊験がじぶんにも同様に起きるかも知れないという期待の拡大のことである。この期待は講員の同質性が担保しているといえる。同じ神仏を拝み同じ生活環境であるなら我が身の上にも霊験が起き得るかもという期待である。対して後者は自身に対して起きた霊験と流通された霊験譚を照応することで、自身の霊験の正当性、すなわち自身の龍神への信心の妥当性について再確認するいわばチェック機能を持っていると考えられる。

『善宝寺龍王講だより』というメディアにおいて「霊験」言説が流通・共有されることとは、具体的な霊験譚を通じて緩やかな共通言説の構築が行なわれていくことであり、それは個別的・非交流的な各龍王講を、実際的なご利益がもたらされる龍神信仰という言説の天蓋で覆っているといえる。その点が信者の獲得と固定化にも寄与しているといえるだろう。

、心會と教祖熊崎健翁

――教団本部における資料調査から――

下村育世

、心道（ちゅしんどう）（後の、心會）については、これまでまとまった調査研究がなされておらず、昭和初期に小さからぬ社会的インパクトを持っていたことは知られていても、現在では既に宗教活動をほぼ停止し、占い活動を主としている教団であることもあって、過去からの教団活動や組織形態、信者のあり方もわかっていない。このような中で共同研究者と筆者は、教団本部において資料調査を継続して行っている。ここでは教祖熊崎健翁（一八八一―一九六一）の思想や活動の展開過程について、これまでに辿りついた中間的結論を扱う。

熊崎は四十九歳まで新聞記者として活躍した後、昭和三年に運命鑑定所「五聖閣」を設立して転身し、昭和七年に、心道をうちたて、宗教家としての道を歩んだ。通常、「宗教」教団において運命学（占い）は、一定の役割を果たす場合でも信仰の道に入るための「方便」として捉えられ、重要な位置づけを与えられることは少ない。その意味で、運命学に出自をもち、とりわけ易の思想が教義上重要な位置を占め続けた、心道は、珍しい事例と言える。そして、熊崎が「宗教」への移行に際してどのような論理の展開をしたのか、内実にどのような変化を伴ったかは、、心道の特徴を捉えるにあたっても重要である。

とりわけ姓名学で知られる熊崎は、運命学の基本は易であるとして、、心道をうちたてるにあたっても易の思想に大きく依拠し、易の「太極」をあらわす「、」（ちゅ）を中心概念とした。運命学の活動から始まった熊崎の実践は、これを機に重心を「宗教」へと次第に移していくことになる。熊崎は理を知り安心立命するのが運命学で、理を知らずとも宇宙の玄妙さを信仰し安心立命するのが信仰とし、前者のもつ体系性や理解を尊

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

重し、運命学は「宗教」を凌駕するものとする。ここでの「宗教」は、既存の諸宗教のことであるが、昭和恐慌後の人心の荒廃により思想善導の必要性を感じていた熊崎は、門人から要請されたこともあり、既存の「宗教」とは異なる、自らの新たな「宗教」の展開へと踏み込んでいく。太極から天地間の万象がことごとく生み出されるとする易の世界観は、それ自身では整然とした世界認識に基づく、「合理的」とも言える自然哲学体系である。これを、心道として再編成することは、時代の要求に沿う宗教の必要性を訴え、既成宗教の前近代性を克服しようとする、熊崎の独自の試みでもあった。

熊崎にあっては、基本的に依拠するところは易の数理的かつ思弁的な世界観であり、強調点に多少の変化は見られるものの、解釈に大きな転換は見受けられない。熊崎の運命学から宗教への変容は、個人的救済に関わる思想体系から社会的性格を持つ形而上学への移行という位相変化とも理解される。そこで「宗教」とされたものは、社会への回路を開く営みであった。「済世救民」という言葉に現れるような社会への関与を熊崎は「宗教」とし、理論の純化と著述、そして運命学実践というような形態で活動していく。

、心道は既存の宗教伝統、あるいは新宗教に基盤を持たない形で成立し、運命学、とりわけ易の思想が宗教として再編成をみたという特徴が明確に見られる事例である。近代日本の新宗教は儒教伝統の影響を受けているとしばしば言われるが、そこに含まれる儒教的要素の直接的影響関係を捉えることは難しい場合が多い。その中で、、心道は儒教伝統の一部である易の影響が明瞭に教義上に見出せる点で稀有な事例といえる。今後は、調査を進めて、、心道や熊崎の思想の展開の内実をより明らかにするとともに、筆者が関心を抱いている、近代における思想体系としての易の解釈史やその位置づけの文脈で、熊崎の自己表明と、自己理解をさらに追究したい。

「みかぐらうた」のひのきしん

堀内 みどり

諸井慶徳は『ひのきしん序説』（昭和二八年改訂版）において、「『ひのきしん』といふ言葉は、近頃むやみにもてはやされて来たやうである。これは一面において寔に心うれしいことではあるが、また他面深い留意が要求せられてならない。……我々は実に『ひのきしん』なる概念の下に我々の行為の在り方を表現せずにはゐられない。それは本教徒の用ゐる一般的代名詞ではなくして一つの内容豊かな固有名詞であるからである。」と述べる。「ひのきしん」が天理教を世に知らしめた行動・活動であったことは、昭和七年に書かれた松村吉太郎『ひのきしん精神』にも、『ひのきしんの意味と展開』（昭和四六年）にも前提のように表記され、自覚されていると同時に、「ひのきしん」の教義的理解や研究は不十分であるという認識が常にあった。

『改訂天理教事典』にも、「天理教信者の積極的な神恩報謝の

NII-Electronic Library Service